令和７年度病害虫発生予報第３号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病害虫名	予想発生量
水稲	**葉いもち**	**やや多**
	ヒメトビウンカ	**やや多**
	縞葉枯病	並
	イネミズゾウムシ	やや少
カンキツ	そうか病	並
	黒点病	並
	カイガラムシ類（ヤノネカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）	並
	ミカンハダニ	**やや多**
	アブラムシ類	やや少
モモ	せん孔細菌病	やや少
	果実腐敗性病害（灰星病、ホモプシス腐敗病等）	並
	褐さび病	並
	アブラムシ類	**やや多**
	モモハモグリガ	少
	ナシヒメシンクイ	並
	モモノゴマダラノメイガ	やや少
カキ	炭疽病	並
	うどんこ病	**やや多**
	落葉病	並
	カキノヘタムシガ	やや少
	フジコナカイガラムシ	やや少

作物名	病害虫名	予想発生量
ブドウ	べと病	並
果樹の共通害虫	カメムシ類	やや少
	ハマキムシ類	**やや多**
青ネギ	疫病	並
	さび病	並
	べと病	**やや多**
	軟腐病	並
	ネギアザミウマ	**やや多**
	ネギハモグリバエ	やや少
アスパラガス	**褐斑病**	**やや多**
	ネギアザミウマ	**やや多**
	ハダニ類	**やや多**
	アブラムシ類	**やや多**
イチゴ（育苗床）	**炭疽病**	**やや多**
	うどんこ病	やや少
	アブラムシ類	**やや多**
	ハダニ類	並
露地キク	**白さび病**	**やや多**
野菜、花きの共通害虫	**オオタバコガ**	**多**
	シロイチモジヨトウ	**やや多**
	コナガ	**やや多**

太文字の病害虫：向こう１か月の間、発生状況に特に注意を要する病害虫を示す。

＊予報根拠中の記号

（＋）：発生量を多くする要因

（－）：発生量を少なくする要因

（±）：発生量が平年並になる要因

令和７年度　病害虫発生予報　第３号（６月）

Ａ．水稲の病害虫

１．葉いもち

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠（1）　５月下旬の早短期栽培での発生は平年と同様に認めなかった。（±）
　　（2）　ＢＬＡＳＴＡＭ（いもち病発生予察システム）による５月の感染好適日の出現頻度は平年並（±）、６月の気象は気温が平年並か高く、降水量が平年並か多い予報である（＋）。

対　策（1）　いもち病対象の育苗箱施薬を行っていない圃場では、今後の気象条件に注意して、本田での薬剤防除を６月下旬から７月上旬に行う。
　　（2）　補植用の置き苗は発生源となるので、補植終了後に速やかに処分する。

２．ヒメトビウンカと縞葉枯病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**ヒメトビウンカ：　やや多**
　　縞葉枯病　　：　並

根　拠（1）　５月下旬の小麦上でのヒメトビウンカの発生量はやや多かった。（＋）
　　（2）　５月下旬の早短期水稲でのヒメトビウンカの発生量は平年並であった。（±）
　　（3）　前年のヒメトビウンカの保毒虫率、縞葉枯病の発生量はともに平年並であった。（±）

対　策（1）　ウンカ類対象の育苗箱施薬を必ず行う。
　　（2）　育苗箱施薬を行っていない圃場や縞葉枯病の多い地域では、本田初期にヒメトビウンカ対象に薬剤防除を行う。なお、早期栽培での防除適期は６月上中旬、短期栽培と普通期栽培での防除適期は７月上中旬である。
　　（3）　本田初期の発病株は二次伝染を引き起こすため、抜き取って処分する。

３．イネミズゾウムシ

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　やや少

根　拠　　５月下旬の早短期栽培において、食痕の認められる株の発生量は平年並、生息成虫数はやや少なかった。（－）

対　策（1）　株当たり寄生成虫密度が0.3～0.5頭（育苗箱施薬を行っている場合は0.5頭以上）に達している圃場は、水面施用剤で追加防除を行う。
　　（2）　根が健全に育つようにできるだけ浅水管理し、成虫の葉の食害が多い圃場では早めに中干しを行うことで幼虫の被害が軽減できる。

Ｂ．果樹の病害虫

－カンキツ－

１．そうか病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並

根　拠（1）　一般圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
　　（2）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）

対　策（1）　幼果期に防除する。
　　（2）　樹勢を健全に保ち、防風対策を行う。

２．黒点病
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並
根　拠（1）　一般圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
　　（2）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）
対　策（1）　伝染源である枯枝を除去し、６月中旬～７月中旬に薬剤防除を徹底する。
　　（2）　梅雨期には固着性の高い展着剤を加用する。

３．カイガラムシ類(ヤノネカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ)
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並
根　拠　　一般圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
対　策（1）　１～２齢幼虫期に防除する。
　　（2）　発生圃場では、かけむらのないように薬剤防除を実施する。
　　（3）　近年発生種が変わってきているため、園地の発生種を確認し防除を行う。

４．ミカンハダニ
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**
根　拠（1）　県予察圃場での５月下旬の発生量は平年並であった。（±）
　　（2）　一般圃場での５月下旬の発生量はやや多かった。（＋）
　　（3）　６月の気象は気温が平年並か高く（＋）、降水量が平年並か多い（－）予報である。
対　策（1）　100葉調査で、１葉当たりの寄生雌成虫数が0.5～１頭になれば防除する。
　　（2）　抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

５．アブラムシ類
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　やや少
根　拠（1）　県予察圃場での５月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
　　（2）　一般圃場での５月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
　　（3）　６月の気象は気温が平年並か高く（＋）、降水量が平年並か多い（－）予報である。
対　策　　発生を認めたら早めに薬剤防除を実施する。

－モ　モ－
１．せん孔細菌病
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　やや少
根　拠（1）　県予察圃場での５月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
　　（2）　一般圃場での５月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
　　（3）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）
対　策（1）　薬剤防除を実施していない園では早急に防除する。
　　（2）　例年多発する園地では果実への感染を防止するため、早めに袋かけを行う。
　　（3）　発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去して適正に処分する。
　　（4）　病原菌は葉や果実の自然の開口部（気孔、水孔等）や傷口から侵入するので、風当たりの強い園地では防風ネット等の防風対策を施すとともに、コス

カシバ、キクイムシ、モモハモグリガ等の害虫防除を徹底し樹勢低下を防止する。

２．果実腐敗性病害（灰星病、ホモプシス腐敗病等）
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並
根　拠（1）　一般圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
　　（2）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）
対　策（1）　発病枝及び発病果を除去する。
　　（2）　収穫20日前から５～７日間隔で、果実に十分付着するように薬剤防除を実施する。
　　（3）　耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

３．褐さび病
予　想　　発生地域：県内全域
　　発生量　：　並
根　拠（1）　県予察圃場での５月下旬の発生量はやや多かった。（＋）
　　（2）　一般圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
　　（3）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）
対　策　　枝の病斑が最大の伝染源であるので、見つけ次第発病葉とともに切り取り適正に処分する。

４．アブラムシ類
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**
根　拠（1）　県予察圃場での５月下旬の発生量は平年並であった。（±）
　　（2）　一般圃場での５月下旬の発生量はやや多かった。（＋）
　　（3）　６月の気象は気温が平年並か高く（＋）、降水量が平年並か多い（－）予報である。
対　策　　発生を認めたら早めに薬剤防除を実施する。

５．モモハモグリガ
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　少
根　拠（1）　県予察圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
　　（2）　一般圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。（±）
　　（3）　県予察圃場フェロモントラップでの５月下旬の第１世代成虫の誘殺は認められなかった。（－）
対　策　　成虫発生最盛期からふ化直後に薬剤防除を実施する。

６．ナシヒメシンクイ
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並
根　拠（1）　県予察圃場での５月下旬の芯折れは平年並であった。（±）
　　（2）　一般圃場での５月下旬の発生は認められなかった。（－）
　　（3）　県予察圃場フェロモントラップでの５月の誘殺数は平年並であった。（±）
対　策（1）　早めに袋かけを行い、無袋栽培では10日間隔で薬剤防除を実施する。
　　（2）　芯折れは枝の中から幼虫が脱出しないうちに剪除する。

(3)　樹上及び地面に落果した被害果は処分する。

7．モモノゴマダラノメイガ
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　やや少
根　拠　　県予察圃場予察灯の５月の誘殺数はやや少なかった。(－)
対　策 (1)　早めに袋かけを行い、無袋栽培では10日間隔で薬剤防除を実施する。
　　(2)　樹上及び地面に落果した被害果は処分する。

－カ　キ－
1．炭疽病
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並
根　拠 (1)　一般圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
　　(2)　６月の気象は、降水量が平年並か多い予報である。(＋)
対　策 (1)　発病枝は見つけ次第除去し、処分する。
　　(2)　６月中～下旬に薬剤防除を実施する。薬剤防除はかけむらのないように散布する。

2．うどんこ病
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**
根　拠 (1)　県予察圃場での５月下旬の発生量は多かった。(＋)
　　(2)　一般圃場での５月下旬の発生量は平年並であった。(±)
対　策　　薬剤防除は、発病初期に、葉裏に付着するように散布する。

3．落葉病
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並
根　拠 (1)　前年秋期の落葉病の発生量は平年並であった。(±)
　　(2)　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
対　策 (1)　樹勢を健全に維持する。
　　(2)　６月～７月上旬に２～３回防除する。薬剤防除は葉裏にも十分付着するように散布する。

4．カキノヘタムシガ
予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生時期：　並
　　発生量　：　やや少
根　拠 (1)　県予察圃場での越冬世代成虫の発生量はやや少なく（－)、発生時期は平年並であった(±)。
　　(2)　一般圃場での５月下旬の被害発生は平年と同様に認められなかった。(±)
対　策 (1)　越冬世代成虫最盛期（５月下旬）の約10日後に薬剤防除を実施するが、できていない場合は、必ず６月中旬までに実施する。
　　(2)　防除を実施したにも関わらず、被害が続く場合には追加防除を行う。

5．フジコナカイガラムシ
予　想　　発生地域：　県内全域

発生量　：　やや少
根　拠　　一般圃場での５月下旬の発生は認められなかった。(－)
対　策　　幼虫最盛期（６月第３半旬頃）に薬剤が幼果のがく部に十分付着するように散布する。

－ブドウ－
１．べと病
予　想　　発生地域：　県内全域
発生量　：　並
根　拠 (1)　一般圃場での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2)　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
対　策 (1)　圃場の排水に努め、敷わらを励行する。
(2)　被害葉は見つけ次第除去し処分する。
(3)　薬剤防除は葉裏に十分付着するように散布する。

－果樹の共通害虫－
１．カメムシ類
予　想　　発生地域：　県内全域、特に山林隣接圃場
発生量　：　やや少
根　拠 (1)　坂出市府中町の予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)
(2)　綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数はやや少なかった。(－)
(3)　一般圃場(モモ)での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
対　策 (1)モモ、ナシ等は、幼果期から被害を受ける場合があるので、有袋栽培では、できるだけ早く袋かけを行う。
(2)施設栽培の場合は、開放口をネット（４ｍｍ目合い）で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
(3)圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
(4)多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
(5)成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
(6)黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
(7)防除薬剤は、主要農作物病害虫雑草防除指針、香川県監修の果樹病害虫防除暦を参考にする。

２．ハマキムシ類
予　想　　発生地域：　県内全域
発生量　：　**やや多**
根　拠 (1)　一般圃場(ブドウ)での５月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2)　県予察圃場フェロモントラップでの越冬世代成虫(4月～5月)の誘殺数は多かった。(＋)
対　策　　幼虫発生期（６月上中旬頃）に防除する。

Ｃ．野菜、花きの病害虫

－青ネギ－

１．疫病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並

根　拠（1）　５月下旬の発生は認められなかった。（－）
　　（2）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）

対　策（1）　圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
　　（2）　発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているので、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
　　（3）　薬剤防除は予防的に７～10日間隔で行う。

２．さび病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並

根　拠（1）　５月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
　　（2）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）

対　策（1）　窒素質肥料は適切に施用し、草勢を良好に保つ。
　　（2）　取り残しの発病株が周辺への伝染源になるので、早めに除去し適正に処分する。
　　（3）　QoI殺菌剤（FRACコード：11）及びDMI殺菌剤（同：３）をローテーションで散布する。
　　（4）　耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

３．べと病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠（1）　５月下旬の発生量は平年並であったが、一部の地域で発生量がやや多かった。（＋）
　　（2）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）

対　策（1）　圃場の排水を良くするとともに、窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
　　（2）　発生株は見つけ次第抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
　　（3）　メタラキシル（FRACコード：４）、マンゼブ（同：Ｍ３）またはフルアジナム（同：29）を含む薬剤、ベンチアバリカルブ等のCAA系薬剤（同：40）をローテーションで散布する。
　　（4）　耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

４．軟腐病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並

根　拠（1）　５月下旬の発生は認められなかった。（－）
　　（2）　６月の気象は気温が平年並か高く（＋）、降水量が平年並か多い（＋）予報である。

対　策（1）　窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
　　（2）　圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
　　（3）　発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているので、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
　　（4）　薬剤防除は予防的に７～10日間隔で行う。

５．ネギアザミウマ

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠（1）　５月下旬の発生量はやや多かった。（＋）
　　（2）　タマネギの県予察ほ場での５月下旬の発生量は多かった。（＋）
　　（3）　６月の気象は気温が平年並か高く（＋）、降水量が平年並か多い（－）予報である。

対　策（1）　圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
　　（2）　ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
　　（3）　抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

６．ネギハモグリバエ

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　やや少

根　拠（1）　５月下旬の発生は認められなかった。（－）
　　（2）　６月の気象は気温が平年並か高く（＋）、降水量が平年並か多い（－）予報である。

対　策（1）　摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど、適切に処分する。
　　（2）　多発してからの防除は困難であるので、産卵痕や食害痕が見え始めたら早めに防除する。
　　（3）　定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

－アスパラガス－

１．褐斑病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠（1）　５月下旬の発生は平年並であった。（±）
　　（2）　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。（＋）

対　策（1）　過繁茂にならないよう、茎葉の刈込みや適切な肥培管理を行う。
　　（2）　刈り取った被害茎葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
　　（3）　発生前から予防的に薬剤散布を行う。
　　（4）　QoI殺菌剤（FRACコード：11）に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。

２．ネギアザミウマ

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠（1）　５月下旬の発生量は平年並であった。（±）
　　（2）　タマネギの県予察ほ場での５月下旬の発生量は多かった。（＋）
　　（3）　６月の気象は気温が平年並か高い予報である。（＋）

対　策（1）　施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設したりするなどして、侵入防止対策を講じる。
　　（2）　圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
　　（3）　圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に１か所当たり１～５頭の成虫を認めたら防除する。
　　（4）　抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない

３．ハダニ類

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠（1）　５月下旬の発生量は平年並であった。（±）
　　（2）　６月の気象は気温が平年並か高い予報である。（＋）

対　策（1）　圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
　　（2）　刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
　　（3）　抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

４．アブラムシ類

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠（1）　５月下旬の発生量は平年並であった。（±）
　　（2）　綾歌郡綾川町の黄色水盤での５月のアブラムシ類の誘殺数は、やや多かった。（＋）
　　（3）　６月の気象は気温が平年並か高い予報である。（＋）

対　策（1）　施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設したりするなどして、侵入防止対策を講じる。
　　（2）　圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
　　（3）　抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

－イチゴ（育苗床）－

１．炭疽病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠（1）　５月下旬の育苗床での発生量はやや多かった。（＋）
　　（2）　６月の気象は気温が平年並か高い予報である。（＋）

対　策（1）　発病葉やランナーは可能な限り除去するとともに除去した発病葉、ランナーは伝染源となるので適正に処分する。
　　（2）　水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返りがないように注意する。
　　（3）　ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗中に伝染環を断つ。
　　（4）　薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
　　（5）　MBC殺菌剤（FRACコード：１）、N-フェニルカーバメート類（同：10）、QoI殺菌剤（同：11）、PP殺菌剤（同：12）に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。

２．うどんこ病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　やや少

根　拠　　５月下旬の育苗床での発生量はやや少なかった。（－）

対　策（1）　ランナーの切り離し前までの防除を徹底し、育苗床で発病を減らすよう努める。
　　（2）　発生圃場では、７日より短い間隔で薬剤防除を行う。
　　（3）　収穫を終了した圃場（本圃）の株は直ちに処分するとともに、子苗(ランナー)を切り離した後、親株は早期に除去し処分する。
　　（4）　窒素肥料の過多や葉が混み合ったりすると多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。

(5)　耐性菌の発生を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

３．アブラムシ類

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠 (1)　５月下旬の育苗床での発生量はやや少なかった。(－)
(2)　防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)
(3)　綾歌郡綾川町の黄色水盤での５月のアブラムシ類の誘殺数は、やや多かった。(＋)
(4)　６月の気象は気温が平年並か高い予報である。(＋)

対　策 (1)　育苗床は防虫ネットで被覆し、アブラムシ類の飛び込みを防止する。
(2)　圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3)　抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

４．ハダニ類

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　並

根　拠 (1)　５月下旬の育苗床での発生量は少なかった。(－)
(2)　６月の気象は気温が平年並か高い予報である。(＋)

対　策 (1)　圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2)　親株床での防除を徹底し、育苗床での防除回数を減らすよう努める。
(3)　育苗床（苗の親株からの切除後）では発生をこまめに観察し、早めに防除を実施する。散布にあたっては、使用回数に留意する。

－露地キク－

１．白さび病

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠 (1)　５月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2)　６月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

対　策 (1)　薬剤散布は発生初期から５～７日間隔で行う。
(2)　耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3)　採穂前の防除を徹底し、本圃に病気を持ち込まないようにする。
(4)　窒素質肥料の過不足がないように肥培管理をする。

－野菜、花きの共通害虫－

１．オオタバコガ

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**多**（令和７年５月19日付け病害虫発生予察注意報第１号発表）

根　拠 (1)　綾歌郡綾川町のフェロモントラップによる５月の誘殺数は多かった。(＋)
(2)　６月の気象は気温が平年並か高く（＋)、降水量が平年並か多い（－）予報である。

対　策 (1)　老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低いので、早期発見に努め、防除効果の高い若齢幼虫期に薬剤散布を行う。
(2)　タバコガ類の幼虫は、作物の果実や生長点付近の茎葉、花蕾に潜り込んで加害するので、その周辺を中心に幼虫を探して、見つけ次第捕殺する。
(3)　被害果実､被害茎､収穫残さなどは放置せず圃場外へ持ち出して処分する。

(4)　ハウス栽培の場合は開口部を防虫ネット（４mm目合以下）で被覆し、侵入を防止する。
(5)　作物によって、登録のある薬剤が異なるので、使用にあたってはラベルをよく読んで、登録の有無や収穫前日数、使用回数等使用基準を遵守する。
(6)　薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避ける。

２．シロイチモジヨトウ

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠 (1)　綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの５月の誘殺数は多かった。(＋)
(2)　６月の気象は気温が平年並か高く（＋)、降水量が平年並か多い（－）予報である。

対　策 (1)　圃場周辺の雑草は増殖源となるため、発生前からの除草に努める。
(2)　ハウスの場合は開口部を防虫ネット（４mm目合以下）で被覆し、成虫の侵入を防止する。
(3)　中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長１cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
(4)　薬剤感受性検定結果を参考にして薬剤を選定する［病害虫防除所発表の防除に関する情報］
(https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichubojo/byogaichu/boujo.html)。
(5)　抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

３．コナガ

予　想　　発生地域：　県内全域
　　発生量　：　**やや多**

根　拠 (1)　綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの４月第３半旬から第５半旬の誘殺数が多かった。(＋)
(2)　６月の気象は気温が平年並か高く（＋)、降水量が平年並か多い（－）予報である。

対　策 (1)　苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。
(2)　中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
(3)　抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しな

6月～8月は、農薬危害防止運動月間です。
農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に使用できているか、チェックしましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ
URL: https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichubojo/index.html